

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成30年度 桐の子タイム (総合的な学習の時間) のまとめ



- 研究大会実践の解説

5年「レッツ・ライフプランニング2018」

- 研究大会の成果・課題を踏まえた実践

5年「レッツ・HAKODATE リサーチング2018」

実践者 上田知沙都

平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度 北海道教育大学附属函館小学校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン～

* 課題設定の理由と研究の経緯 については、「研究のまとめ」を参照して下さい。

1. 「単元のデザイン」とは

単元のデザイン

単元の目標を達成する（≡「資質・能力」の育成を目指す）ために…

- ① 単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの**単元の構想**をする。
- ② ①を子供の**問題解決のストーリー**の視点で**整理**する。
- ③ 学びの文脈を生み出したり、つないだりする**支援**を**具体化**する。

まず前提として、授業づくりを行う時に重視しなくてはならないのが、主体的・対話的で深い学びを通して、単元の目標を確実に達成することです。そのための、「単元のデザイン」は、本校では3つのステップにより行われています。

最初は、単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり、各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して、どのような学びを展開すれば、単元の目標が達成できるのかを考えます。その時、単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し、どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして、単元の構想をすることが、第1のステップです。

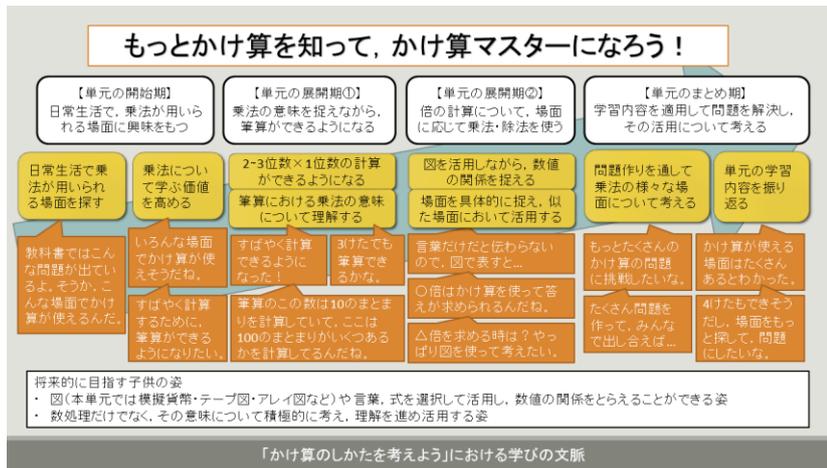
次は、その学習活動の流れを、子供の問題解決のストーリーの視点で、整理します。先述の通り、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を獲得・育成していくには、子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え、単元における問題（課題）を解決することに、必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが、第2のステップです。

最後に、「学びの文脈」を生み出したり、つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して、子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには、適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり、間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また、各教科等の特質や単元のもつ特性、児童の実態などにより、その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え、単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが、第3のステップです。

2. 単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

- ① 教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
- ② 教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
- ③ 現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）

中央教育審議会答申（中教審 197 号）、p27



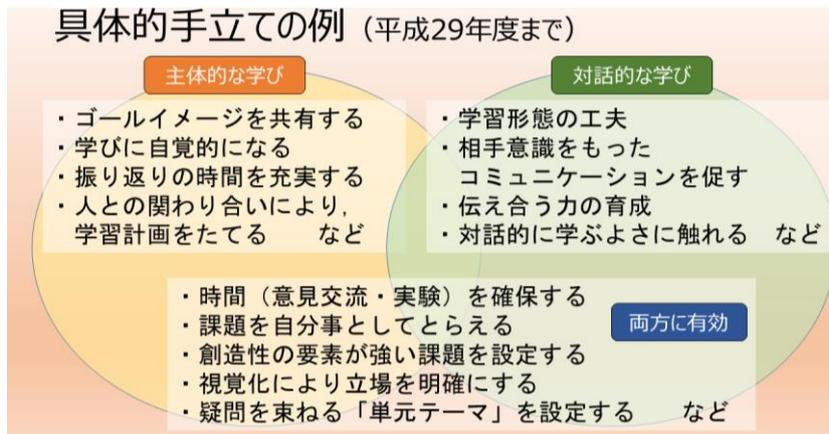
これまでの研究で、資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の3つがあるとされています。

これまで本校では、「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は、本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら、その単元で育成を目指す資質・能力

が②や③の資質・能力の育成にどのようにかわり、「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には、単元の学習終了時や、その教科等を学び進めた時、あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし、それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために、指導案上で「学びの文脈」を図化することで、①の資質・能力の育成はもちろん、②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。



3. 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

今回の研究では、これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを、各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し、単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより、授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み、資質・

能力を育成することができるかを、より明確に見出すことができました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは、単元や題材を選びません。また、教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば、「気づきを生む資料と出会う」ことや、気づきから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては、各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば、「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは、より「深い学び」を実現する手立てとして、活用できると言えます。

桐の子タイム(総合的な学習の時間) 研究大会実践の解説

単元名 5年「レッツ・ライフプランニング2018」

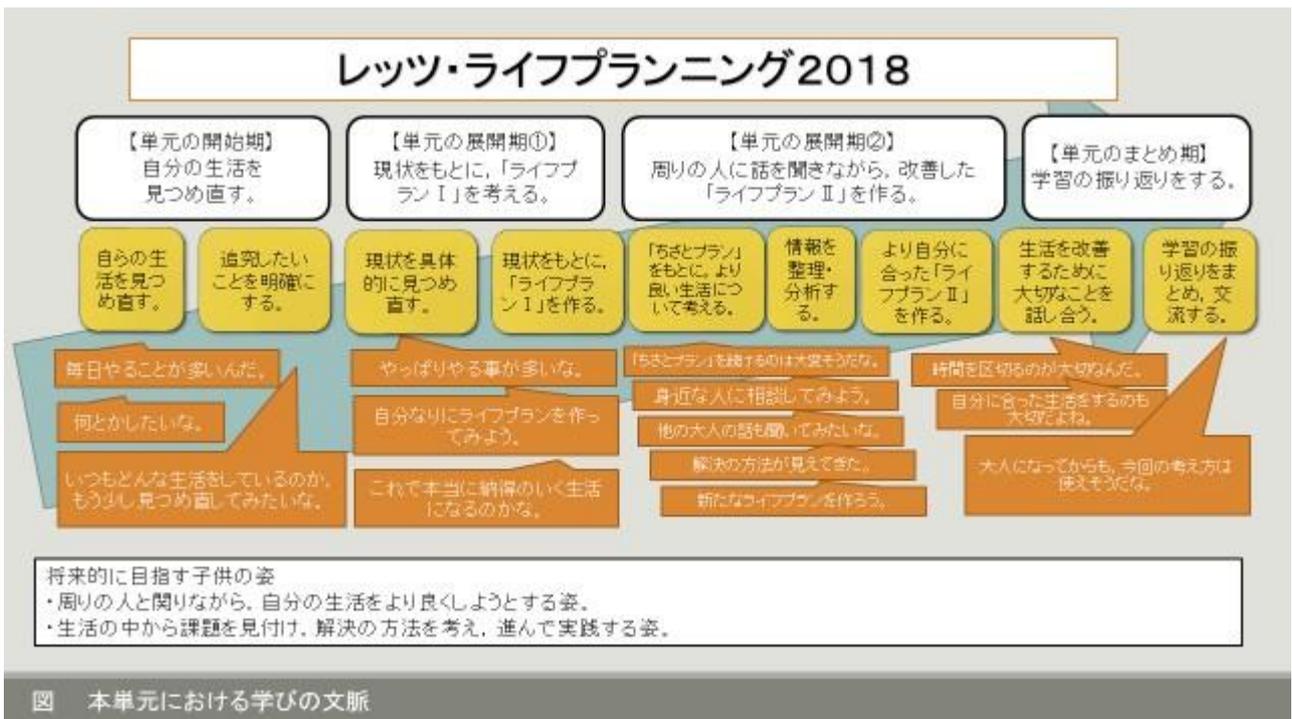
(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちが、

- ・自らの生活の場から問題点を見付け、解決の方法を考える
- ・多くの人と関わって、生活をより納得できるものにしようとする

ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

<p>ア 自らの生活の場を見つめ直す。 イ 追究したいことを明確にする。</p>	<p>開始期</p>
<p>ウ 現状を具体的に見つめ直す。 エ 現状をもとに、「ライフプランⅠ」を作る。 オ 「ちさとプラン」をもとに、より良い生活について考える。 カ 身近な人やゲストティーチャーにインタビューしたり、友達と意見を交換したりしながら、情報を整理・分析する。 キ より自分に合った「ライフプランⅡ」を作る。</p>	<p>展開期</p>
<p>ク 生活を改善するために大切なことを話し合う。 ケ 学習の振り返りをまとめ、交流する。</p>	<p>まとめ期</p>



(2)「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

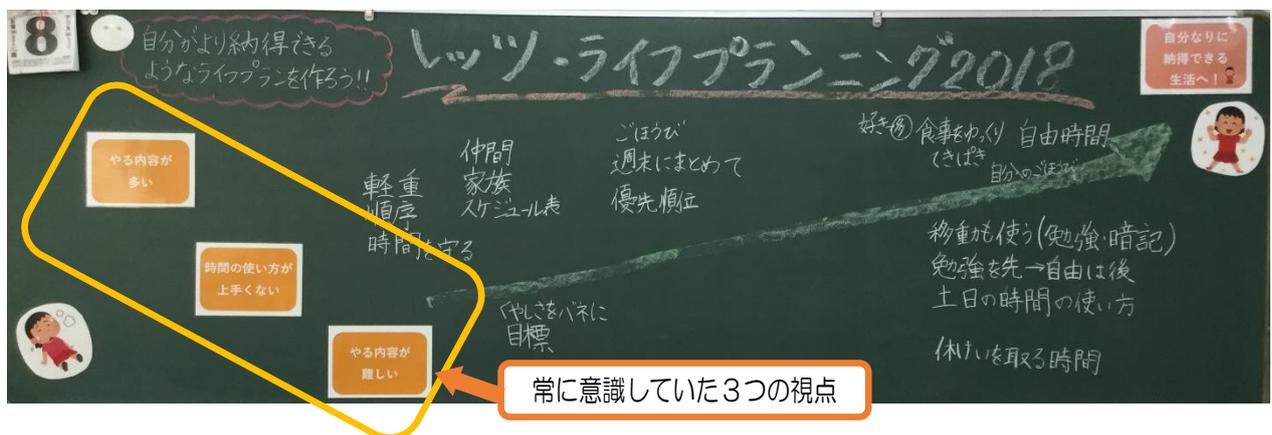
学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

手立て① 自らの生活の問題点を焦点化する3つの視点

本單元における「自分の生活と関わる人々」という探究課題は、子供にとって興味・関心や必要感があり、自然と主体的に学びを進めていくことができると考えました。

しかし、子供達のそれぞれの生活を扱うことによって、人間関係や子供自身の生活など、個人的な面が浮き彫りになり、全体の課題意識の共有がしづらいのではという不安もありました。そこで、児童の実態（毎日の生活に疲弊している）と、目指す姿（より納得できる生活に改善していく）から課題追究の視点を3つ（①内容が多い、②時間の使い方、③内容が難しい）に絞っていくことにしました。

イ 子供達がそれぞれの生活上の問題を話し合いながら、教師は分類する板書構造を意識的に行うことにより、子供達は共通課題を意識しながら、3つの視点を子供の言葉から位置づけることができました。このことにより、子供達は共通課題を意識しながら、各自の課題を追究したり、よりよい生活に向けた話し合いをしたりし、考えを深め合うことができました。



手立て② 子供が問い続けられるような工夫をする。

教師が事前に子供の思考を想定し、活動を方向付ける場面を意図的に設定することで、子供達が次なる「問い」をもち続け、意欲的に探究を進めていくことができるようにしました。

エ 自分の問題点を改善するために作ったライフプランⅠを

見合う活動で、「でもこれだと自由が無いな。」「これだと続けられるかな。」といった思いを抱く子がいました。そのことを全体で確認しながら、「じゃあどうすればよりよい生活になるの?」という問いを共有しました。

オ 子供達の問いから、担任の小学生時代の生活を改善した「ちさとプラン」を提示しました。この「ちさとプラン」は、問題点への気づきをさらに深めるために、問題点を過剰に改善したものです。このプランの修正点を考え、話し合う活動を通して、よりよいバランスに目を向けた子供達は、「じゃあ、自分の生活をどうすればより良くできるのか?」という問いのもと、それぞれのライフプランを改善し、ライフプランⅡを考案するための情報収集の計画を立てることにつながりました。

〈ちさとの生活〉

- ・小学校時代のちさとの生活（土曜日バージョン）→やる事が多くて、いつも疲れていた。

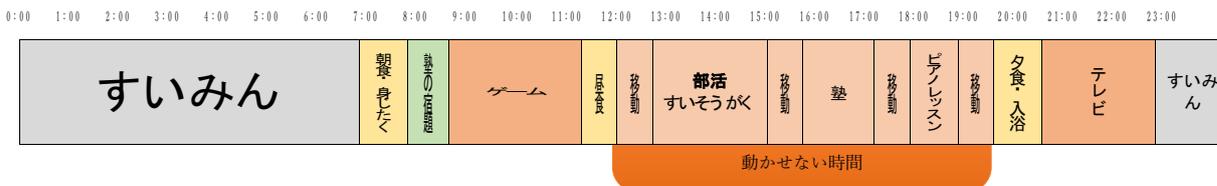


〈提示したちさとプラン〉

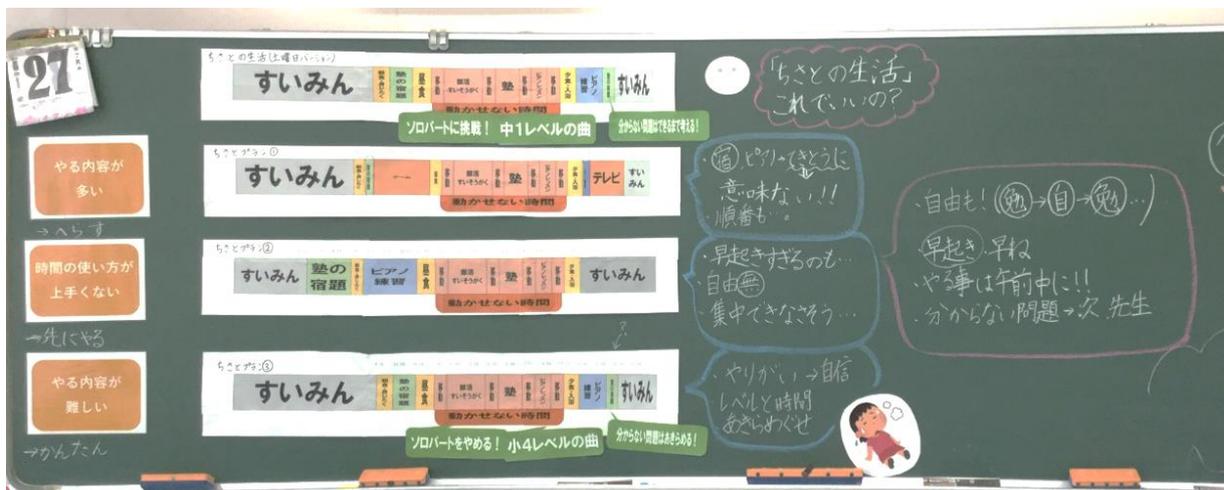
- ・ちさとプラン1→休憩時間を減らして、朝から夜まで頑張るプラン。
→これだと、ストレスが溜まるし、全てが中途半端になりそうだね。



- ・ちさとプラン2→自由時間を増やしたプラン。
→これだと、楽なことを選んでしまう。自分を好きになれないだろうね。



- ・ちさとプラン3→内容のレベルを下げたプラン。
→ これだと成長できなくて、自分に自信がもてないね。



カ ライフプランⅡを考案していく中で、「自分のライフプランが本当にいいのか？」という「問い」が子供達の中に芽生えました。そこで、人生の先輩である身近な大人やゲストティーチャーの話聞く機会を設定し、子供達はそこで得た情報も踏まえながら、ライフプランの完成を目指していくことができるようにしました。

〈身近な大人へのインタビュー〉

- ・いつも身近で自分の生活を見ている、家族（親や兄弟など）にインタビューをしている子が多くいました。具体的な改善策を聞いて、ライフプランの作成の際の参考にしていました。

いつも長時間勉強をしていても偉いんだけど、もう少し休憩を入れると、効率が上がるんじゃないかな。



なるほど。途中で集中力が切れてしまうことが多くあるよな。このアドバイスを取り入れてみよう。

〈ゲストティーチャーの話〉

- ・子供たちの「もう少し色々な人から話を聞きたい。」という要望をもとに、W教諭をゲストティーチャーとしてお招きし、話を聞きました。それにより、ライフプランを作る際の新たな考え方を手に入れることが出来ました。

人生経験豊富なW先生は、これまでどの様に困難を乗り越えてきたんだろう。



W先生とは…

- ・いつも優しく書写を教えてくれている先生。
- ・本校教諭や校長を経験し、退職した経験豊富な教諭。

時間が無い時には、「やることリスト」や「予定表」を作って乗り越えたよ。あとは、支えてくれる人への感謝も大切だよ。



「やることリスト」というのは、自分にも取り入れられそうだな。やる事が多い時には、リストに優先順位を書き込んで、そこから順番にやってみよう。

手立て③ 話し合う目的を明確にした対話場面の設定。

エ 子供達一人一人が自分の生活を見つめ直すことができるよう、子供達と共に、スケジュール表にまとめていく活動を設定しました。そのことで「今の生活に満足している。」と言っていた子も、「もっとこの時間を増やした方が良いのかな。」と、生活に対する問題点を見出すことができました。また、ライフプランをもとにしてお互いの生活を良くするための交流活動を行う際には、教師が事前に子供達の記録や思考を見取り、「あの子も似たような悩みをもっているよ。どう考えたか聞いてみたら。」などと、目的に合った話し合いができるようにという声掛けを行いました。それにより、「時間を増やすだけだと疲れるかもしれないから、僕も〇〇さんと同じように休憩を挟んでみようかな。」などと、更に良いプランを考えることができました。



研究大会実践の成果と課題

成果

「レッツ・ライフプランニング2018」を通して、どんな資質・能力を育成するのか、そして子供がいかに問題解決をしていくのかを考えて、単元を構想することができました。

単元の途中で、子供から「今の生活に満足している。」という声が上がったことがありました。しかし、1週間の行動を書き出して、見つめ直していく中で、「やる内容が多くて、つかれる。」「やる内容が難しすぎてついていけない。」などの声があがりました。一人一人が切実感をもって、生活に対する問題点を見出すことができていました。

その後、ライフプランの作成を通して、「実際に生活してみたら、これまでよりも納得できる生活になった。」という変化が見られました。また、「まだ実践することはできていないけれど、これから年齢が上がるにつれて、どんどんやる事が多くなっていくと思うけれど、どうすれば生活が改善できるかが分かった。」「ゲストティーチャーの話聞いて、困った時には周りの人に相談することも大切だということが分かった。」など、今後の生活で生かせそうだという意見も出てきました。

このように、単元を通して、子供たちは自らの生活を主体的に見つめ直し、自分なりに納得できる生活へ改善していこうとしていたと感じています。

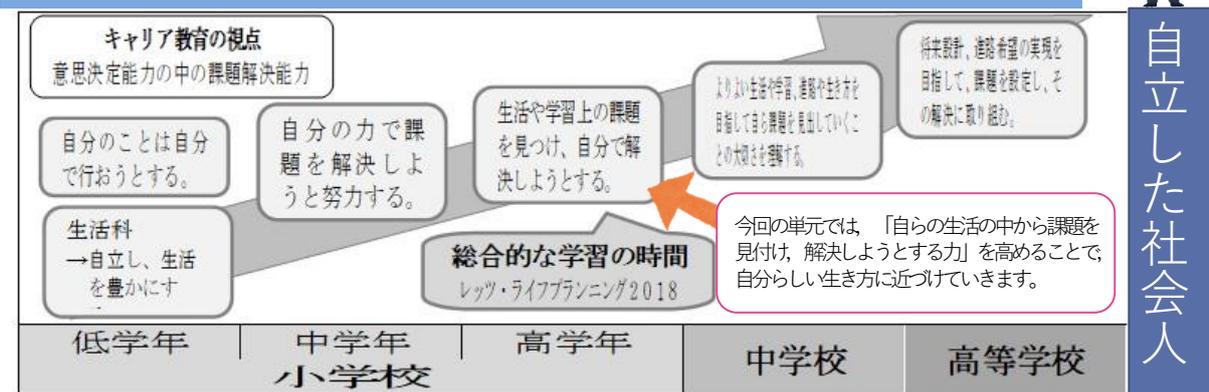
課題

本単元では、キャリア教育を軸にした単元構成として、他教科等との関連を位置付けていきました。ただ、しっかりとしたつながりを踏まえられなかった部分や教師が捉え切れていなかった面もありました。頭の中で意識していることを顕在化し、単元配列表を充実させていくことが必要だと改めて感じました。

また、キャリア教育については、幼児教育や生活科の学び、総合的な学習の時間、そして中学校・高校・大学、更には社会生活へのつながりを見据えた上で、どの時点でどの力をどれだけ高めていくのか、より明確にしていく必要があると感じます

今後も、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントの一層の強化が必要だと考えています。

キャリア教育 →「自分らしい生き方を実現する力」を培う教育



実践提案「興味・関心を大切にした単元作り」

5年「レッツ・HAKODATE リサーチング2018」

(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、子供たちが、

- これまでの学習や生活から、自分の興味・関心に合ったテーマを設定する。
- 函館市について分かったことをもとに、他の地域について考えを広げる。

ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

	開始期
ア 自分がこれまでの学習や生活で興味をもったことを見つめ直す。	
	展開期
イ 興味をもったことの中からテーマを設定する。	
ウ 資料を使って追究する。	
エ 調べたことを、ミニカードにまとめる。	
オ 函館市について分かったことをもとに、他の地域に考えを広げる。	
	まとめ期
キ 単元を振り返る。	

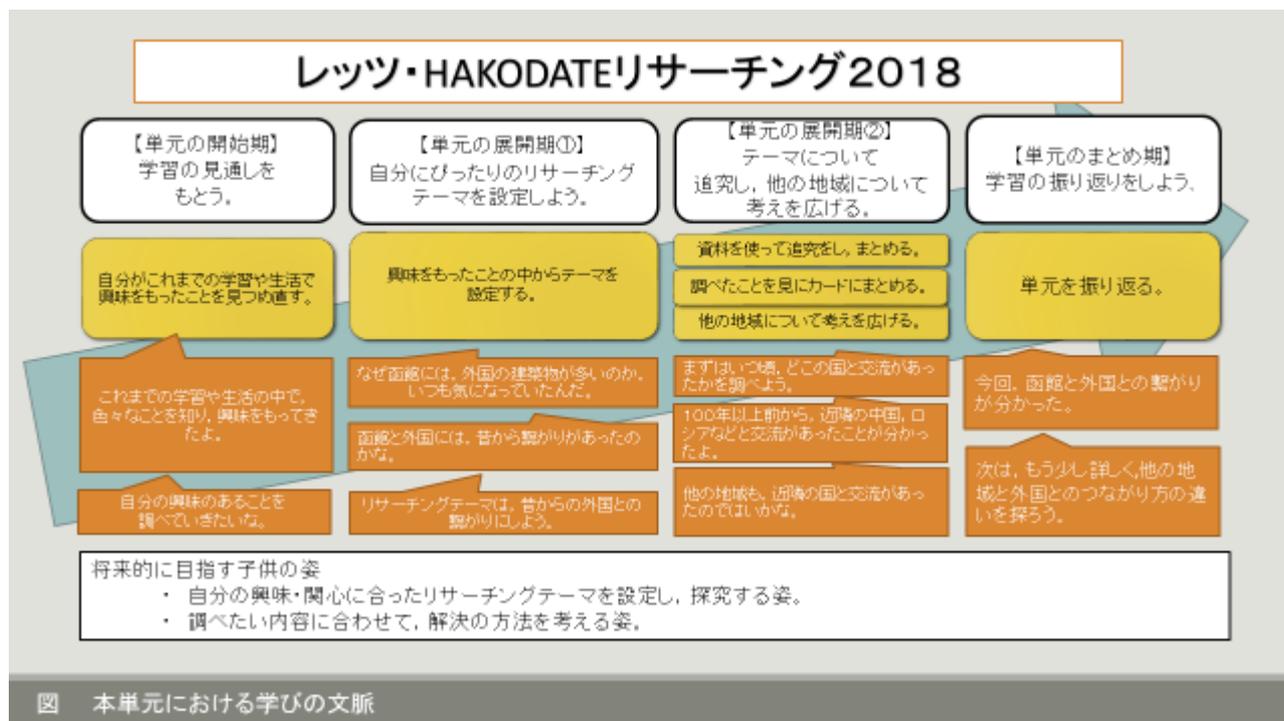


図 本単元における学びの文脈

(2) 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような3つの手立てを行いました。

手立て① 子供の興味・関心をもとにテーマを設定する。

ア 子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」を作ることができるようにしました。3学期に入り、学年として修学旅行の準備を進めていく中で、自分達が「観光客」という立場になるという意識をもつようになりました。その活動の中で、第4学年の桐の子タイムで取り組んだ「函館PR隊」（函館市の良さを調べ、観光客に伝える活動）について振り返りました。子供達と、「観光客として他の地域に行った時に、果たして『自治体魅力度ランキング第1位』の函館の良さを、現地の人達に伝えられるだろうか。函館と他の地域を比較しながら、学びを深めて来る事ができるのだろうか。」という話になりました。そこで、これまでの教科等の内容や学習で生まれた疑問や興味・関心をもとに、歴史、政治・経済、文化・芸術、自然科学の中から、児童自身が調べたいジャンルを選び、函館のよさを調べていくことにしました。それぞれが課題解決した内容を共有することで、自分が調べていないジャンルの魅力も知ることができ、函館市の魅力を他の地域の人達にも伝えられると考えました。

手立て② 子供が問い続けられるような工夫をする。

ウ 修学旅行の自主研修に向かうという課題を設定していたため、児童自身が大変意欲的に課題解決を進めていました。解決を進めていく中で、「函館の歴史について、たくさんの事が分かったけれど、その中でも特に戊辰戦争のことが知りたいな。」などという声が挙がりました。そこで、子供達の頭の中にある問いを明確にし、次の課題につなげられるよう、「その日のまとめ」と「次回調べること」をメモすることができるワークシートを作成しました。これを繰り返すことにより、より深く追究をすることができていました。

次回調べること

レッツ・HAKODATEリサーチング2018

名前[]

1. 今回調べること

2. 分かったこと

3. その日のまとめ

4. 次回調べること

手立て③ 話し合う目的を明確にした対話場面の設定。

イ～オ 教師が、それぞれの児童が調べているジャンルを把握し、意図的に声掛けをして、同じジャンルについて調べている仲間との対話の機会を設けました。対話をする事により、「函館の地名にこんなにアイヌ語が由来のものがあるの？例えばどこ？」と、新たな考えを手に入れたり、「箱館戦争のことはかなり詳しくなったよ。みんなにたくさん教えたいなあ。」調べたことに自信をもったりすることができるようになりました。また、自信をもつことにより、自分と違うジャンルについて調べている仲間にも、自分の言葉で説明することができていました。違うジャンルについて調べる友達との対話では、これまでに知らなかった函館市の魅力に気付くことができていました。

今年度の研究を通して

成果

今年度は、児童の興味・関心をもとに探究課題を設定することにより、児童自身が「学びの文脈」を作り出すことができていたと考えます。

特に、「レッツ・ライフプランニング2018」では、自分の生活の問題点について無自覚だった子供達が、自分の生活を見つめ直したり、対話したりすることにより、自分の生活についての興味・関心をもつようになっていきました。そして、探究のプロセスの中で、自分なりに主体的に学ぶ姿が見られた。また、「レッツ・HAKODATE リサーチング2018」でも、自ら設定したテーマについて、新たな「問い」を生み出しながら探究を進めていました。

今後も、引き続き「児童自身が生み出す学びの文脈」を意識して、探究課題を設定していこうと考えます。

課題

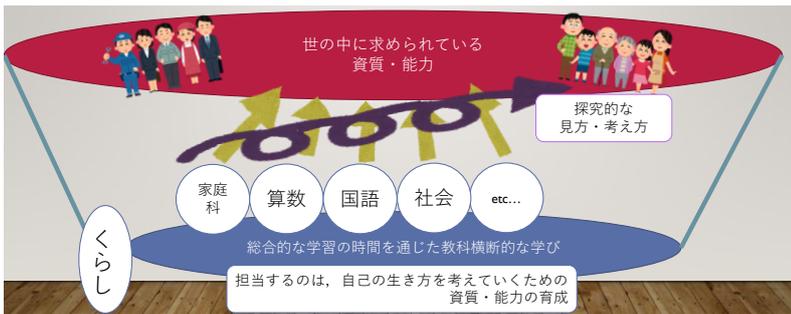
今年度は、単元の中での「学びの文脈」を意識することができましたが、カリキュラムの工夫というところまで至っていませんでした。

単元を一つの独立したものと捉えるのではなく、より俯瞰的に見る視点をもつ必要があると感じました。そのためには、児童に付ける資質・能力をより長いスパンで考える必要もあると考えます。

実践を踏まえての展望

今後は、もう一段階視野を広げ、全教育課程を俯瞰して「総合的な学習の時間」の単元を考えていくことが求められると考えます。

どの時期に、どの資質・能力を、どの位身に付けさせるのかを考えて、単元を構想していきたいと思います。



総合的な学習を通じた教科横断的な学び

研究大会の内省を受けて見つめ直した教科横断的な「学びの文脈」

